小学校の英語教育

― その目標と目標達成のために劇活動を取り入れた実践 ―

玉川学園　小川 恵子

● はじめに

玉川学園は来年創立80年を迎えるが，創立当初から児童英語教育を行ってきた。そして2006年に，幼稚部から高等部までが1つの学校となるK-12（Kは幼稚部，12は12年生）の新体制に移行し，児童英語教育を低学年（1～4年生）で，教科書を使用したテキストベースの英語教育を中学年（5～8年生）と高学年（9～12年生）で実践している。この改革は，偏差値教育や受験教育に翻弄されない一貫教育の推進のためであるが，この改革に踏み切るまで4年間にわたりカリキュラムの検討がなされた。その中で私たち低学年（1～4年生）の英語科教員は，K-12の中で10歳までに身に付けさせたい力は何なのかを再検討しつつ，シラバスの改訂に取り組んだ。すでに多くの小学校で英語活動が実践され，英語が小学校の正課となることが決まった今，玉川学園低学年での取り組みが，他の小学校の参考になればと思い，ここに報告する。

1　小学校の英語教育の目標と達成の視点

(1) 言語や文化に対する理解
(2) 4技能と自己表現力
(3) 相互理解と実践能力

以上の3点を目標としているが，これらは中学校の外国語の指導目標と重なる部分が多い。だが，その解釈は異なる部分がある。4技能（聞く・話す・読む・書く）については，読み書きができることをゴールとするのではなく，読み書きはあくまでも音声をサポートするためのツールとして捉えている。児童の捉え方でいえば，音声は残らないので，残すために文字を使う。そうすることで学習の足跡を残すことができる。その時教師は，児童が dog と書くべきところを bog と書いても，音声で [dog] と言えていればよしとし，dog のスペリング練習を課すことはしないという考え方である。小学生が10回書いても覚えられないことが，中学生は書かずに見ただけで覚えられることがある。書くことについては，子ども達にそのレディネスができてから完璧を望みたい。

また，自己表現力については，自分から一歩前に出て英語を使ってみようとする態度を育てることが目標である。小学生，特に10歳までは，チャンスさえあれば英語を話してみたいという前向きな姿勢を持っている児童が多い。要はその気持ちをしっかりと持ち続けさせることができるかどうかである。そのためには，英語で自己表現する場を数多く設定すること，また児童が表現してみたくなるような教材を用意することが肝要である。全員で同じ英文を暗唱したり，いろいろなパタ

ーンプラクティスをさせるのも悪くはないが，そこから自己表現へと発展させることが重要である。英語が身に付いたと感じる瞬間は，自分の言いたいことが言えた時，そしてそれが相手に理解されたと感じた時である。それを踏まえ，児童にそれぞれが言いたいことを他者に伝える場を設定したい。これは，教師が児童と共に英語活動を創る場であるともいえる。

相互理解については，「国際理解」とせず，国を超えた理解の前に，まず隣りの友だちの気持ちが分かる子どもを育てたい。互いの気持ちや考えが理解できてこその国際理解である。この考えから，英語の学習では児童同士の助け合いを奨励している。隣りの席の友だちが困っていると察したら，積極的に手を差し伸べる姿勢を児童に求めたい。困っている人を助けるという当たり前のことが，授業の中ではなかなか難しい。上手に助け，素直に受け入れることはさらに難しい。しかしながら，英語はこの点を最も効果的に指導できる教科であり，英語を通して人との交わりやコミュニケーションの基本を教えていきたい。

2 児童と創る英語活動
—3年英語劇『大きなカブ』の実践から—

1の目標を達成するために，最適な教材として英語劇をあげることができる。英語劇活動によって，英語に対する理解，自己表現，相互理解といった目標を，児童の主体性を活かしながら，総合的に達成することが可能である。指導の手順として，台本を配付し「これを覚えましょう」では，児童に主体的な活動を期待することはできない。先にも述べたが，英語が身に付いたと実感できる瞬間は，自分の言いたいことが言えた時で，英語劇指導を通して児童に主体性を発揮させる中で，この瞬間がたくさん訪れる工夫をしたい。

(1) 絵本『大きなカブ』の読み聞かせ

絵本の読み聞かせが英語劇への導入部に当たる。大型サイズの絵本を使って全体に読み聞かせを行う。読み聞かせの際の留意点としては，ゆっくりはっきり読む。内容理解が難しい場合は，動作で示す。それでも無理なら意訳をする。何が何でも英語で進めようとすると，正しく理解されない場面があったり，内容をふくらませずに終わったりということが起きる恐れがある。むしろ私たち日本人教員が指導に当たるメリットを活かし，適宜日本語で説明をする方が，児童にとって親切な授業となるし，また読み聞かせで扱うことのできる洋書絵本の幅も広がる。例えば，物語冒頭の Once upon a time を「昔々」と言うと，子ども達から「英語にも『昔々』の言い方があるんだね」という反応が返ってくる。こうした学習の場面も大切にしたい。

▲絵本の読み聞かせ

(2) 英語劇で表現する

絵本の読み聞かせの時点で，じっと聞いていられず動作を付けて楽しむ様子が見られる。この様子を受けて，そのまま劇にしていくのは難しいことではない。絵本の言葉をそのまま台詞にして児童に言わせていく。慣れてくると，この場面ではこう言いたいという自発的な取り組みが見られるようになる。そ

の時をとらえて「その言い方は英語でこう」と教えると，その表現は児童のものになりやすい。例えば，動物が次々と登場する場面では，英語で鳴き声を入れよう。「馬はneigh!これは聞いたことがない」などと口々に言いながら，動物の鳴き声を学習していく。あるいは，歌を入れてもっと楽しくしよう。歌うなら「マクドナルドじいさんの農場」“Old McDonald Had a Farm” がいい。動物のところを劇に出てくる動物に入れ替えて歌おう。このような児童の工夫を出しきったところで，内容を整理し台本にして配付する。台本を配付する頃には，ストーリーの流れと台詞はすでに頭に入っている。

(3) 台本を読んでみる

英語劇で表現活動をするかたわら，台本に目を通させると，「読めるようになっている！」と驚きの声を上げる児童が大勢いる。音声で入っている言葉を文字で読んでいくのは，それほど難しくないということを，子ども達が実感する瞬間である。この時に味わう達成感は後の学習意欲につながるので，大切にしたい。

ここに台本に繰り返し出てくる台詞を列記する。発表の頃には全員が言えるようになる台詞である。

▲劇の練習風景

Please help us pull up this beet. / We want to eat the beet for dinner. / Sure, we'll help. / But the beet did not come up. / Oh, no, we can't.... What should we do? / Let's call the horses. / That's a good idea! / Horses, Horses, please come here. / Neigh! Hello, Mr. and Mrs. McDonald, what's up?

(4) 発表会をしよう

発表会といっても大掛かりなものでなく，互いが見合って工夫や努力をたたえ合う場としての発表会である。発表の場を持つことで，これが励みになり，練習も活気を帯びる。小学生は元来人を楽しませることが好きであるから，皆でショーを楽しもうという気持ちで臨ませたい。恥ずかしがらずに人前で大きな声で英語が言えたことは，大きな自信につながる。

● おわりに

小学生の時期に第一に身に付けさせたい力はと聞かれたら，それは自己表現力であると答える小学校の英語科教員は多いのではないだろうか。その理由は，恥ずかしがらずに自分を出せる小学生の時期をおいて，自己表現力を無理なく効果的に伸ばせる時期はないからである。表現することを通して，英語の基礎力はより確かなものとなる。「英語が使える日本人」の第一歩を，小学生の時期にしっかりと歩み出させたいと考える。